

同窓会だより

1980年10月10日
大阪市立大学工学部同窓会
〒558 大阪市住吉区杉本町459
TEL 06 (692)1231代
発行人並河俊次編集人見宗男



会報発行に寄せて

同窓会々長 並河 俊次

不順な天候が続き、景気動向も思わしくない昨今ではありますが、皆様方には益々御精励の事と存じ上げます。

さて今回工学部同窓会の会報を発行する事となりました。先般のオ一回評議員会での決議事項を実施したのですが実際に刊行する事になると、大学に残られた同窓の諸先生方に大変な労力を強いる結果となり、厚く御礼を申し上げます。

今回は初刊の事でもあり、学内の教育・研究の実態の紹介を中心に記事としましたが、今後は会報を通じて同窓の皆様のコミュニケーションの場となり、学内諸行事の通報の場となり御利用戴けるように、会報を育成して頂きたいと存じます。

本年は本学の前身である大阪商業講習所開設より100年目に当り、創立100周年の諸行事がこの秋に計画されております。しかし学制改革による新制理工学部の設立から数えましても既に30年、旧制市立工専設立からでは40年近く経過しました。今までのわが国経済界の大人物は文科系の方々に限られましたが、これからは理工科系の同窓生にも産業界なり科学技術界で活躍する人物が輩出する事と思います。又世に出ないまでも人のため、世のために、真に尽される人々も多いと思われます。そして今日では教育が学生時代にのみに享受するものでなく、進歩する世のあらゆる科学知識を絶えず吸収するためには、同窓の皆様も市民としての再教育や生涯学習を謙虚に受ける姿勢が不可欠となってきました。皆様も何等かの形に於いて、大学と関係を持たれ、心豊かな、生き甲斐ある人生を送られる事が人間として要求される時代になりつつあります。

本報がこのための一助ともなりましたら誠に幸甚と存ずる次才であります。(電気・昭和30年卒、松下電器産業(株)電化研究所室長)

竣 工：1966・8・10
工 費：7億9千万円
総延面積：19000㎡

- A棟(2階建) 事務室・会議室・図書室等
- B棟(5階建) 電気・応化・応物研究室等
- C棟(5階建) 機械・建築・土木研究室等
- D棟(2階建) 応化・土木・応物実験室
- E棟(2階建) 機械実験室



工学部正面玄関

ご挨拶に代えて——

市大と工学部のこのごろ

名誉会長 三輪 雅久

工学部同窓会がますます発展されて、今度から会誌を出されるようになったことを、心からおよこびいたします。

今年度は創立 100年の年に当ります。「おかげで 100年」という呼びかけの記念行事ポスターが、

学内各所に今貼られております。今年は年度のはじまりと共に、関係のある組織で次々と、100周年関連の行事が始まりました。

5月3日の中之島全国歌祭における大阪商大予科の登壇がその開幕でありました。続いて5月16、17、18日の桜宮へ戻ったボート祭には、大島市長も二日間にわたって、応援にかけつけて下さいました。さらに5月24日には有恒会の90周年行事で、市大 100年が祝われ、7月上旬には、恒例の三商大定期戦が本学を当番として開かれました。こうして大学の内外にわたって、「100年」の記念行事の秋の日程をめざして盛りあがって来ております。

工学部もおかげ様で充実してまいりまして、都島工専以来、3分の1世紀を越える歴史になりました。この昭和55年3月期までの卒業生・修了生を単純に合算しますと、6,312名になります。その他に研究生、研修生など、工学部で勉強した人の総数を採るとすれば、約 7,000名にまで達するのではないのでしょうか。粒揃いで一騎当千の同窓諸兄姉のご活躍と、連携を切に祈ります。

工学部にはこの4月から太垣和一郎教授が戻って来られ、また名誉教授である井本稔先生が栄ある叙勲を受けられました。嬉しいかぎりであります。

ところで、私達の工学部はどう見ても小さな工学部であります。工学の進歩に即応して学部ないしは大学院工学研究科の質的な充実強化を図らなければ、工学部の将来は無いのではなからうかと考えられます。そういった認識から、大学院の整備充実をテコにして市大工学部の次の発展を考えようという構想をまとめ、工学研究科の将来を開きたいというのが、私達の念願であります。同窓諸兄姉のご声援を期待する次第です。

石油地帯をめぐる国際緊張も続き、一刻も気の許せないような時代のようにありますが、皆さんの御活躍を祈ります。
(工学部長・建築学教室教授)

コミュニケーションの場として

同窓会副会長 大橋 弘之

会員の皆さん、お元気でお過しですか。当会も発足以



来20年を経過し、会員数も6000名を超えました。インフォーマルなグループながらこのような多人数の組織の人々には、仲間意識にいた一体感やそこはかとなくたよる共感など、気持ちの安らぎに役立つものがあればと思います。そう

いう意味でも今回の同窓会報の創刊は本当に嬉しいことです。我々の生きている複雑な社会の中で、インフォーマルな形とはいえ、各人の仕事の場以外に、何か共通の経験をもつ同窓生によって読まれ、書かれ、議論され、心と心の交流の場があるのも良いものではないでしょうか。このようなコミュニケーションの手だての一つとして会員名簿と共に、同窓会報が折にふれて役立つものと信じます。

そこでその創刊に寄せて一言、(説教じみて恐縮です)……ゲートのファウストの中に「人間は努力している間は迷うにきまったものだ」という分りきったような言葉がありますが、味わってみると中々深い意味があるような気がします。たとえばこの言葉の反対は、「努力を中止すれば迷いはなくなる」ということになります。誰でも迷いは苦しいことで、一刻も早く解決が欲しいと思うでしょう。しかし、誰に相談しても、複雑な社会や自分の将来のことなど、満足な解答は得られないものです。

やはり自分で迷い、出来る限り自分自身で努力してみるより仕方ないでしょう。ところで、「迷う」ということは即ち疑問を持つことだと思えます。社会問題、人生問題でも「何故か」という問いを発することが一番大切です。「何故か」と問い続けること、そこから対象を探求していく精神が生れてくると思えます。もし何らの疑問も持たず、世間や誰かの云う通りに鵜呑みにしていったら——言うまでもなく、これは自分の思索の放棄です。他人に考えて貰うことは気楽なことに違いありませんが、そのうちに自分の自由も失ってしまうことになります。疑問を持つことが迷うことならば、迷うことは自分自身で考え、努力することでもあります。どうか皆さん、大いに迷い、自分自身で考えることに努力しようではありませんか。……愚言多謝

さて、今年は1980年という10年サイクルの起点の年であります。しかも、11月15日には我が大阪市立大学創立100周年を迎えます。工学部同窓会報の創刊が丁度この時期に実現するのは、誠に喜ばしいことと思えます。そして、同窓各位のご協力が、より意義深い会報として実りますよう一層暖いご支援をお願い申し上げます。
(土木・昭和20年卒・近畿通信建設(株) 土木部長)

電気工学科卒業の皆さんへ

北浜 安夫



日本経済も苦しいトンネルを抜け、やっと明るさを取り戻してきたようです。このような状況まで回復するのに卒業生の皆さん方も血のにじむような努力をされたことと思います。皆さんの御活躍のおかげで卒業生の就職状況も昨年

頃から好転し、今年度は求人申込がすでに数百社を突破し、現在でも引き続き申込がある状況です。これは、上にも申しましたように皆さん方の努力が積ってかく盛んになったものと感謝いたしております。

現在、電気工学教室の講座講成は表のようになっており、この編成のもとに各先生方がそれぞれ教育並びに研究に専念されており、その研究活動の成果が各方面から

注目されていますことは心強い限りです。これらの成果については学会雑誌、連合大会予稿あるいは技術雑誌などを参照していただければ幸いです。御意見なり御批判をお願いします。

現在の社会情勢において、技術者、特に電気系技術者に対する期待はまことに大きいものがあります。このような期待にこたえるためには、我々教職員のなご一層の努力を必要とすることはいうまでもありませんが、卒業生の皆さんの御協力が何よりも必要と思われまふ。立派な電気工学科とするために、お気付の点がありましたら遠慮なく申し出ていただくようお願いいたします。

最後に電気工学科として残念なことは、昨年は田中通雄先生、一昨年には高橋光雄先生が、また本年3月には北嶋靖三講師がなくなられたことです。皆さん方とともに御冥福をお祈りいたしたいと思います。(電気工学教室主任教授)

講座名	教授	助教授	講師	助手	技術職員
電気回路学	竹屋 芳夫	提 四 郎		鈴木 裕 南 繁行	福原敏行
電子回路学	北浜安夫	志水英二		松下賢二 重田利夫	長谷川浩史
電気計測工学	安藤慶一		前川義治	草開 稔 青笹正夫	川野和彦
電気通信工学	山下一美	細川省一	岡本次郎	浜 裕光 藤原直賀人	
電気機器学	奥田 滋		建部 涉 渡辺博己	森下 昂	
情報工学	奥本隆昭				

機械工学科卒業生の方々へ

兵働 務



今年とはくに気候不順の夏でしたが、皆様如何お過しですか。

昭和20年に機械工学科の卒業生が社会に出られて以来今年で35年を経過しました。今年3月迄の機械工学科卒業生は都島工専 214名、工学部 805名、大学院修士92名の多数になります。これらの方々が社会の第一線で活躍されておられると思うと本当に心強い限りです。工学部の同窓会名簿も4年ごとに発行されるようになり、私共教職員も含め同窓生のお互の連絡・協力が大いに役立って

いることと思います。さらに今年は大阪市立大学創立100周年を迎え、秋には後に紹介されておりますように様々な行事が予定されています。本当に喜ばしいことと思っています。近年は就職のシーズンになりますと、企業の重職につかれた同窓生の方々が直接見えられ、後輩を是非にと云って求人への依頼をされることが多くなりました。今後は工学部同窓生として、また市立大学同窓生としても卒業生が互いに連帯と親交をますます深めてゆかれることと思います。

扇町校舎より現在の杉本町に移転して以来15年を経過しましたが、移転当時に比べ工学部学舎は緑に囲まれた良き環境になりつつあります。扇町時代の諸先生の中には他大学に移られた方々や、定年を迎えられた先生もおられます。これらのほとんどの先生方も元気で後進の指

導と研究に励んでおられますことは同窓会名簿によって
 知って頂けることと思います。しかし北尾先生が昭和43
 年現職で、南条先生が定年後昭和53年に亡くならまし
 たことは本当に残念なことです。この場をかりてお知ら
 せさせていただきます。

さて私共機械工学科の教育と研究の現状をお知らせし
 なければなりません、下記のように表にまとめてみま
 した。教員は21名、技術員3名の少数ですが教職員一同
 は精いっぱい努力を続けております。授業の修得で10
 年位前から特に変ったのは必須課目がなくなり、卒業に
 必要な単位数を提供課目全体の中から選ぶということに
 なったことです。また科学技術論という講義が始まってい

ます。これは工学部全体に行なわれているものですが、
 工学を学ぶ者は科学技術の進歩を追うだけでなく、その
 有り方や社会との関連また自らの責任を認識することが
 必要ではないかとの考えから、学内外から広く講師を招
 いて教員・学生共々に聴講しています。私共の教育や研
 究の取組み方について卒業生の皆さんから色々率直な御
 意見もお聞きしたいと思います。そして気楽に杉本校舎
 にお立ち寄り下さることを願って居ります。どうか卒業
 生の皆さんが厳しい社会情勢下ですが充分御健康に留意
 され益々御健闘されますよう切に願っております。

(機械工学教室主任教授)

講座名	教 員	研 究 内 容 () 内は昭和54年度4回生卒研テーマ
材料力学	(教授) 藤井太一 (助教授) 水川 清 (講師) 福田武人 (助手) 前川善一郎	応力解析、金属・非金属および複合材料の破壊機構、動的挙動(組合せ曲げねじり衝撃荷重を受ける複合箱型はりの破壊挙動の研究。 SMC法による高強度FRP板の機械的特性のばらつきに及ぼす強化材の影響の研究。円筒状FRP構造物の振動特性)
流体力学	(教授) 星野達郎 (助手) 東 恒雄 (助手) 布部 誠	流路内の流れの諸特性: 脈動、分岐合流、流量係数、純流体素子(開口面積が周期的に変化する二次元仕切弁の動的損失特性。 水平平板の下面に沿う放射状液膜流れに関する研究。直角屈折管の流れ特性に関する実験的研究)
内燃機関 および 測定工学	(教授) 東野一郎 (助教授) 守田栄之 (助手) 渡辺紀彦 (助手) 秋山貞夫	内燃機関関係の計測、情報処理制御、ロケットによる太陽極紫外線の観測 (ガンリン機関の過渡運転時における機関性能の計測。統計的手法による 内燃機関診断法。マスキングを用いた混合比計のデータ処理装置。走行 シミュレータに関する研究。車両モデルによる変速機制御に関する研究)
機械力学 および 繊維工学	(教授兼) 藤井太一 (助教授) 上田祐男 (講師) 深井完祐 (助手) 南斎征夫	機械材料物性、繊維機器に関する研究(張力下における繊維圧縮変形。中 炭素鋼の球状化焼なましによる機械的性質について。熱可塑性高分子材料 の降伏過程に関する研究。S55C鋼の摩耗特性と組織との関係について)
機械工作 および 機械材料	(教授) 玉村謙太郎 (講師) 上神謙次郎 (助手) 森元時夫 (助手) 若林三記夫 (機械工作室助教授) 中山 守	切削、研削、塑性加工油剤作用機構を中心とした研究(19Cr2Mo ステン レス鋼の研削加工層に関する研究。パニシ仕上に関する研究。有向性加工 層の微視的残留応力に関する研究。ステンレス鋼の円筒ブランチ研削にお ける極圧添加剤の効果。難削材用ベルト研削油剤に関する研究。プラズマ アーク加熱高温切削における雰囲気の効果。切くずから刃先形状を推定す る方法)
熱工学 および 化学機械	(教授) 兵働 務 (助教授) 森島直正	洗滌集塵の基礎研究と熱と物質移動を中心とした研究(球形粒子の液面上 での跳躍。気泡による直接熱交換の実験)

応用化学科—その創立と現状

大津 隆行



本応用化学科の誕生は、昭和24年大阪市立大学に理工学部が新設され、その理学科に化学系の数講座が設けられたに始まります。この理工学部の設置方針は独自の、Technische Hochschule に倣い、理学と工学の壁を破り、両者の研究・教育の交流を通じて、理学（基礎）を身につけた工学技術者の育成を意図したものでありました。そのため4年次の卒業研究を行うに当たって、学生は理学系研究室あるいは工学系研究室を選ぶことによって、それぞれ理学士あるいは工学士がとれるというユニークさがあり、国公立大では初めての「新構想学部」として世間の注目を浴びました。この理工学部時代に270名の工学士、14名の理学修士、5名の理学博士を世に送っています。

しかし高度成長期に向けての時代の流れは、10年後の昭和34年に理・工分離へと発展し、化学系も理学部化学科と工学部応用化学科に分れ、今日の形が出来上がったわけでありました。このようにして、当初の理工学部構想がくずれ、通常大学の理学部・工学部制へと大きく転換するなかで、応用化学科としては当面講座の充実（7講座）、将来化学工学系学科の増設などの方針を打ち出したわけでありました。

当時（昭和34年）の応用化学科は、無機工業化学講座〔教授：長浦茂男（昭和53年故人）〕、有機工業化学講座〔教授：熊田 誠（昭和37年まで、現京都大学教授）〕、高分子化学講座〔教授：井本 稔（昭和39年まで、現本学名誉教授）〕のわずか3講座でありましたが、同時に大学院工学研究科応用化学専攻の修士・博士課程も開設され、井本 稔教授を中心に、従来からの構想を生かしつつ、活発な研究が進められました。その後、昭和38年反応工学講座〔教授：井本立也（昭和50年まで、現日本バルカー（株）専務）〕、昭和39年合成化学講座〔教授：井本 稔（前出）〕が設置されて5講座となり、新計画も軌道にのったかに思われました。

30年代は日本の高度成長期に当り、各大学では応用化学系学科などの新設、増講座、充実が続きましたが、40年代に入り高度成長にかげりが出始め、さらに大学紛争に入るに及んで、これらにも大きくブレーキがかけられるようになりました。本工学部はもとより、応用化学科も設備はかなり充実されたものの、昭和39年以來上記5講座以上の増講座をみないまま現在に到ったことは誠に残念でなりません。

昭和48年の石油ショックを契機に低成長時代に入り、

資源・エネルギー論が高まるなかで、応用化学科の果す役割も多様化し、3度目の近将来像の見直しが必要となりました。大阪市の財政から大巾な講座増は期待できない現状ではありますが、当初計画からしてもう一講座増をはかること、学部・大学院学生の定員増をはかることなどを当面の努力目標として、工学部全体の構想のなかで実現させたいと考えております。

幸いに応用化学科各教員は、創設者井本 稔名誉教授を始め、上述の先任教授の業績を受け継ぎ、さらに大饗茂教授（昭和37～48年まで、有機工業化学講座担当、現筑波大学教授）、故箕浦有二教授（昭和38年～54年、原子力基礎研究所教授、工学研究科委員）の指導・協力を得て、着実に研究・教育の実をあげてきたことは誠によろこばしい限りであります。これ迄に応用化学科として工学士 730名、工学修士 310名、工学博士80名を世に送り、また卒業生諸兄がそれぞれの分野の第一線で活躍されていることはご同慶の至りであります。

最近、応用化学科では長浦教授（53年11月）と箕浦教授（54年8月）に相次いで急逝される不運に見舞われました。ここに卒業生諸兄ともども両教授の御冥福を祈りたいと思います。また、今年4月から太垣和一郎教授が有機工業化学講座の担当者として赴任されました。最後に、現在の応用化学科各講座の教員と研究活動分野について紹介させて頂き、同窓生諸兄の御健勝と御支援を願います。

第一講座（無機工業化学）〔大橋邦夫助教授、欄 章講師、五百井正樹助手〕理論電気化学、光電気化学、有機電気化学の基礎分野の研究、ならびに酸化物、半導体などの電極材料、電極触媒、金属錯体触媒などの応用研究。

第二講座（有機工業化学）〔太垣和一郎教授、幸塚正児助教授、玉垣誠三助手、荻野健治助手〕有機硫黄化合物の合成、反応機構、生物の化学的機能をシミュレートした人工酵素、人工生体膜の合成とそれらを用いる有機工業化学プロセスの確立等。

第三講座（高分子化学）〔大津隆行教授、山田文一郎講師、佐藤恒之講師、圓藤紀代司助手、森薫輝技術員〕ラジカル重合ならびにその機構解析、チーグラー・ナツタ触媒によるオレフィンの重合、新規モノマー、開始剤、ポリマーの合成、重合とキャラクターゼーション等。

第四講座（反応工学）〔原納淑郎教授、小郷良明助教授、矢野吉威講師、大嶋 寛助助手〕固体触媒工学、固定化酵素・微生物を用いる生物化学反応工学、溶液中での結晶生成・吸着・コロイドの凝集などの分離工学、高圧下のメカノケミカル反応等。

第五講座（合成化学）〔木下雅悦教授、仲矢忠雄助教

授、国枝紀夫助手、山内 清助手、三浦洋三助手]
 高分子合成とくにテンプレートやミセルを反応場とする特殊な重合反応、生体関連高分子の合成ならびに機能性基を含む高分子の合成を中心とした研究。
 (応用化学教室主任教授)

建築学科の近況

川村 純夫



第一次石油ショック以後続いた不況も多少緩和されてきたのか、昨年度あたりから就職状況も多少楽になり、今年度は 300社にも及ぶ求人件数に達している。しかし 10年前に比較して建設企業というよりは、多種多様な産業からの建築学科への求人割合が多く、中には学生はむろんのこと教員にとってもとまどう場合も多く、希望通りに就職するのはなかなか難しい現状である。

現在の建築学教室は次のような編成の下に教育ならびに研究に専念しております。

研究活動について主なものを挙げると、大スパン架構の力学性状に関する解析的研究(建築構造研究室)、空気膜及び吊屋根構造の空気力学的特性に関する研究、都市における風環境に関する研究(建築防災・建築材料研究室)、都市における大気汚染に関する研究(建築環境研究室)、地区計画、居住環境、土地利用、都市と人口、都市の成長等の研究(都市計画研究室)、生活環境施設の建築計画的な研究、歴史的環境保全に関する研究(建築計画・建築史研究室)、等であるが、これらの他にも優秀な研究が数多く行なわれており、それらの成果が国の内外で高く評価されつつあることはご同慶の至りである。

わが建築学科も都島工専卒業生を昭和20年に送り出し、昭和28年市大として第1期の卒業生、昭和55年3月第22期生を世に送り出したことになる。最近、役所・会社等に顔を出しても思わぬところで卒業生の方にお逢いし、種々の便宜をはかっていたり、就職の情報を御教示願ったりして教室の方も大変助っている次第である。

また、現在卒業生の方に非常勤講師として教育面でもご援助を賜っている次第である。(建築学教室主任教授)

講座名	教授	助教授	講師	助手
建築防災 および 建築材料学	川村 純夫	下鳥 正孝	木本 英爾	木内 龍彦
建築構造学	日置興一郎		坂 壽二	那谷晴一郎 村上 益美
建築環境学			太田 洋一	新居 洋子 大倉 良司
建築計画 および 建築史	多胡 進		福田 晴虔 杉山 茂一	中野 明
都市計画	三輪 雅久	斉藤 和夫		浜田 学昭 赤崎 弘平
図 学	上田 光雄	三輪 嘉男		田中 康夫

土木工学科卒業の皆さんへ

(研究・教育の近況報告)

中井 博



暗いトンネルのような1970年代も過ぎ去り、今や陽光かがやかしい1980年代を迎えつつありますが、卒業生の皆様には益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

土木工学科も早いもので、第1回の卒業生が出られてから25年がたち、局長や部長の重責の役につかれた方、課長・係長として多忙を極めておられる方、また設計・施工等のエキスパートとして、あるいは、気鋭のフレッシュマンとして御活躍されている方々約 800名にも達しました。

この間、大学のほうも定年退任された諸先生方、途中で栄転された先生方、新たに教室メンバーとして残られた方、など幾多の変遷を経て今日に至っておりますが、土木教室の30周年を記念し、土木会のほうで会報特集号を作成中でありまして、近日中に皆様の手元に届くように努力中でございます。

それで、この場をかりまして、土木工学科の研究・教育の近況のみを御報告させていただきます。

御存知の方もおられると思いますが、日進月歩の土木技術の進歩に既応するために、講座名を若干変更し、下記のようなメンバーで教室が構成されていることを、まず御報告いたします。

そして、各教授の指導のもとに、活発な研究活動を行っております。昭. 55年度の研究テーマを列記いたしますと、つぎのように多岐にわたっております。

[構造工学研究室]

道路橋鉄筋コンクリート床版の疲労機構の究明、道路

橋鋼・コンクリート合成床版の開発、厚板構造の弾性および非線形解析手法、波浪による浮板構造の弾性応答解析。

[橋梁工学研究室]

ADSLによる橋梁構造物の振動解析、Multi-Cell箱桁橋の立本的応力解析法の研究、ランダム交通荷重による応力頻度分布調査、曲線桁腹板の耐荷力の研究、鋼製ラーメン橋脚の耐荷力解析、圧縮補剛板の合理的設計提案。

[土木材料研究室]

各種土木材料の工学的性質、舗装構造の設計、土質安定、地盤改良、材料の有効利用、繊維強化材料、混和材料、鉄筋コンクリートの付着強度、コンクリートの支圧応力、収縮・クリープ、温度応力、ひび割限界状態と終局応力。

[土木計画学研究室]

土木施設の維持管理システム、土木施設計画に関する総合評価、居住地における交通環境の分析と評価、生活ゾーン規制、自動車走行モード予測、交通機関分担問題、複合交通ネットワーク問題、土地利用と交通発生、道路標識。

[河海工学研究室]

海岸・海洋構造物への波作用、係留浮体の波浪応答と係留力、海岸構造物への船舶衝突防止と緩衝工、海岸構造物からの波浪反射と消波工、構造物に働く波力問題への有限要素法の適用、海岸・港湾構造物の安定性。

[土質工学研究室]

粘土の圧密理論とその適用法の研究、遠心力を利用した土構造物の模型実験、軟弱地盤の圧密改良工法の研究、粘性土の強度異方性、粗粒土の非排水せん断特性、埋設

研究室	教授	助教授	講師	助手
構造工学	園田 恵一郎			堀川 都志雄 小林 治俊
橋梁工学	中井 博		北田 俊行	酒造 敏広
土木材料学	三瀬 貞	西堀 忠信	山田 優	真嶋 光保 根来 日出晴
土木計画学	西村 昂			岡村 治子 日野 泰雄
河海工学	(三笠正人)		久保 直	倉田 克彦 角野 昇八
土質工学	三笠 正人	小田 一紀	高田 直俊 望月 秋利	東田 淳

(昭. 55. 9現在)

応用物理学教室の近況

管に加わる土圧、ロックフィルダムの安定。

教室の若い方も日頃よく勉強され、山田さんは、昭、53. 9～54. 3 イギリス、クイン・メリー大学に留学、小田・角野さんは昭、55. 3 オーストラリアの海岸工学国際会議で研究発表、そして小林さんは昭、55. 8、カナダの国際理論・応用力学講演会で研究発表をされています。さらに、北田さんは阪大小松教授の御指導のもとに昭、55. 6 学位論文をまとめられました。また、真鳴さんは、昭、55年度繊維強化コンクリートに関して京都大学と共同研究をされています。

一方、教育の面では、大学紛争とその後のにがい経験から基礎科目を必修、応用科目を選択とし、しかも土木技術者にとって必要とされるものを出来るだけカバーするように厳しく指導をしております。すなわち、〔必修科目〕工業製図、測量Ⅰ、Ⅱ；構力Ⅰ、Ⅱ；鋼構造（橋梁）同設計、振動工学；土木材料、コンクリート工学、コンクリート構造工学（鉄筋コンクリート）Ⅰ、同設計、土木材料実験；土木計画、交通工学、道路、鉄道；上下水道、環境工学；水理Ⅰ、海岸、河川、港湾；土質力学Ⅰ、Ⅱ、土木施工；卒業研究〔選択科目〕応用数学Ⅰ、Ⅱ、電子計算機（FORTRAN）、構力Ⅲ（FEM）、鋼構造Ⅱ、構造物実験法、都市計画、土木法規、水理Ⅱ、地盤工学、基礎設計……

このほか、土木工学総論を1回生前期に全教員で担当し、早くから土木技術者としての素養を身に付けさせるようにしております。また、3回生には学外実習（夏季実習）に行かせ、実務につけさせております。そして、4回生のときには、特別講義として職域での御苦労話なども交え、河原畑・井上・原田の諸先生から御指導を載っており、将来はもう少し枠を拡大し、卒業生の皆様から各専門分野の御教授を賜えるようにと考えております。

昭和56年度の学生諸君の就職の見通しは非常に明るく、諸先輩の御支援もあり、多数の求人募集がきており、だいたい希望のところに決まるものとうれしい判断をしております。ただ、せっかくむづかしい入学試験に合格したにもかかわらず、その後、不勉強、無気力な学生が若干いること、公務員試験に合格する学生が最近少ないことが悩みの種であり、これから土木教室教員一同その対策を十分に検討し、学生を鋭意指導してゆきたいと考えております。

最後に、卒業生の皆様の一層の御活躍と御健康をお祈り申し上げます。また、市大工学部発展のために御支援下さいますようお願い申し上げます。

（土木工学教室主任教授）

横田 万里夫



大阪市立大学工学部の建物は大和川のほとり、美しい環境の中にあります。本当に美しいかとお疑いの方は一度是非おいで下さい。我が応用物理学科はそのB棟の4、5階にあります。

応物教室で一番長老の兼松 太教授は、長期の学部を代表する立場での御苦労のため一時ご健康を害しておりましたが、漸く回復されて昔のサムライにもどられました。そして、美馬宏司講師、藤井康夫助手、林野正善技術職員等の協力のもとで、真空計測・質量分析計および固体表面をしらべるためのオージェ分光法などの研究が進められています。

大倉 熙教授は益々意欲を燃し、最近スイスから2年振りに帰朝した森 雄造助手と、二重共鳴法やレーザー光を用いた高度の技術で、イオン結晶中の欠陥や不純物に関し、精密な量子物性学の研究を進め多数の成果を得られています。

村井 昭助教授は昨年一年間のイギリス留学を終え、曾我部 伸助手と共にガスレーザー、特にレーザー管内での化学反応の研究をしています。

笹沼道雄助教授は軟X線および真空紫外分光を研究し、INSORグループでの研究もしています。石黒英治助手もINSORグループの一員として活躍する一方、新しい分光装置の研究もしています。

人見宗男講師、北田忠義助手、串部宏之助手の3人は瀬戸内海の汚染特に内海での赤潮の発生機構について、播磨灘を対象に各種の物理的素過程のケース・スタディを続けています。

西村 仁講師はイオン結晶・有機半導体中の励起子特にその緩和過程の研究を進めています。

横田は、統計力学的に定常状態の低周波揺動を調べる一方、リゾルヴェン形式で非線形分光を論じています。

谷本 脩助教授は分子の電子構造を多体問題としてグリーン関数法を用いて論じています。

鶴飼正二助教授は、非線形偏微分方程式の研究で活躍する一方、全工学部の応用数学を担当指導しています。

最後になりましたが、昨年3月退官された戸村正夫名誉教授は、その後も時々神戸商船大学へおもむき、光物性の研究を継続され、論文を発表されるなど元気で御活躍中です。

以上のように、応用物理学科は少い研究費にもかかわらずそれなりに研究成果をあげてきました。今後卒業生の皆さんの社会でのご活躍にも励まされ、なお一層の努力を致すつもりです。（応用物理学教室主任教授）

あのころは

手塚 二郎

昭和30年前後を扇町学舎で、いつのころからか今は記か憶に定かでないが、30年代の大半を、工学部と兼担の伊藤克三先生（現阪大教授）と山田幸一先生（現関大教授）、それに私の三人が教養部に移り、3号館の一隅にその居を構えた遠い昔の話である。

当時、扇町にあった建築学教室では、杉本学舎を杉本村と通称していたが、いつのまにか、私がその村長さんという異名を頂いた。

こゝで工学部の学生、家政学部（現生活科学部）住居学専攻の学生（殆んど女姓であった）の必修科目であった「図学」の補助兼研究室の留守番役を果したことになる。何せ助手の身分の気安さで、講義には直接責任なく、専ら教材・試験問題等のガリ切り、それを手動の謄写板で、大量のプリント作り、時には製図実習のお手伝いに烏口の研ぎ方を伝授する他は、勤めの全時間を建築環境工学の採光・照明の研究に、恩師でもある伊藤先生を助け、御一緒に楽しく専念したあの頃が、今無性に懐しく、かつほろ苦く甦える。私の前半生で最も勉強した時期でもある。

とにかく、のどかであった。自由であった。あのころの杉本町界隈は、市の最南端区にふさわしく、まだまだ田園の風情があった。駅周辺には、木製でしかも大輪の灌漑用風車が数基、ひねもすゆうゆう廻っていた。研究室にどこからか闖入の雀命救助に奮闘したこともあった。不幸にも窓ガラスに激突した残骸を処理したそんな日課もあった。年末ともなれば、近くの大鷄舎で、超肥満、脂肪でみなぎったひねどりを求め、解剖？料理し舌鼓を打ったこともあった。駄辨にプレーキをかけよう。

現在、各専門の分野において母校を支へ、夫々の学会・企業集団で活躍中の、当時理・工学部の若い先生方と自由闊達に交流したし凡そ10年に及ぶ村長在任は、私にとって終生忘却できない。加えて入学当初で、きわめて扱い易い？学生と学科専攻の棒を越え接触できたのも幸いに尽きる。呑気に送る私を恐らく終始はらはらと案じ下された周辺の先生の推挙で、当地に赴任するため住み心地満点の市大を昭和41年3月に決別した。

私と工学部同窓会との係わりは、離職直前の昭和40年に、当時2代目会長の河合さん（応化28年卒）、人見さん（機械31年卒）、天野さん（建築33年卒）らと、今にして回想すればかなり強引に「同窓会名簿第2号」を編輯・出版の作業であった。いろいろ迂余曲折を経て、現在名実ともに充実した本会に限りない愛着を覚え夢を託している。あのころめぐり会った諸先生・同窓諸兄らのご

健康を祈って擱筆。（建築、昭和23年卒、国立豊田工業高等専門学校教授）

都島工専と市大工学部の関わり

植木 正富

この機会に、旧都島工専の沿革を走り書きでご紹介して、会員各位のご理解を得ると共に、今後一層のご好誼を賜りますようお願い申し上げます。

都島工専は、昭和18年4月、大阪市立高等工業学校として、現都島工業高校の地に呱呱の声をあげました。機械、電気、建築、土木の4学科で、創設時の入試競争率は10倍強でありました。昭和20年3月、工業専門学校と校名が変更され、昭和26年3月に閉校となったもので、6期で881名の卒業生にすぎません。京都帝大名誉教授（土木工学）の故平野正雄氏が初代にして最後の校長でありました。

太平洋戦争末期の昭和20年6月、空爆によって木造校舎を焼失したため、同年9月から北天満国民学校（北区浪花町）の分教場へ建築、土木学科が移りました。その月末に第1期生135名が卒業し、翌21年4月からは、菅北国民学校（北区菅栄町）に全学科の1・2学年生が移転しました。更に10月には、元桃丘国民学校（天王寺区北山町）に全学が移転するというようなジプシーの学生生活でありました。

昭和22年12月に新制大学制度に関連して、工業大学昇格期成同盟が結成され、全学を挙げて昇格運動が展開されました。在校生は学生大会を開いて大学昇格に関する歎願書に血判署名することを決議し、各科分担して梅田、難波、上六、阿倍野の各ターミナルで一般市民にも署名を訴えました。翌23年2月、この血判歎願書を添え、近藤大阪市長、田村市議会議長へ陳状書を提出しました。そして5月には、「都島工専を中心とした総合的な特色のある市立工業大学の創設に努力されることを望む」という意見書が市議会で満場一致可決されました。

このような経緯をへて、翌24年2月に、商・経・法文理工・家政の5学部からなる新制大阪市立大学の設立が、文部省から認可され、昭和24年度から開校されたのであります。かくして都島工専は、昭和26年3月限りで8年間の校史の幕をおろしたのでした。（土木、昭和24年卒大阪府三島郡島本町水道部長）

昔と今

柏田 幸男

理工学部を卒業して早や27年、入学後から数えると31年経ちました。去年が新制大学発足30周年に当る年でした。

学生当時は振りかえってみますと、新制大学の第一回

入学生であった私達の環境は決して十分なものではありませんでした。先づ大國町の仮校舎で受講、次いで扇町の南校舎で、そして北校舎、分室が拡張されました。しかし移転・拡張といっても新築校舎にではなく廃墟に焼け残った建物を応急的に修復、改修したもので、今杉本町の広大なキャンパスに立ち並ぶ立派な校舎、研究設備から見ると誠に貧弱な環境、設備の中での学生生活でした。敗戦後日も浅いこととて当然のことですが、今日の如き立派な工学部に発展し得たことは実に恩師諸先生方の並々ならぬ御努力と研究に対する情熱の賜ものと感銘いたします。

現在は環境にもまた物質にも恵まれたよき時代です。しかし反面人の心は、恵まれれば恵まれるほど怠惰に陥ってゆく気がします。物の貧しい時代には工夫をこらしそれを補い、そしてその工夫が又新しい工夫を生み出すといった進展が今日の文明を造りあげてきたのだと思いますが、今は種々な物、便利な道具が整っていて、それらを使うことにより可成りの仕事が簡略となり、時間も節約できる時代です。そしてそれらにより生じた時間を更に進展のために有効に利用出来る時代です。しかしこれらの時間を有効に利用されているかという、私自身決してそうとは言えない昨今です。便利きのあまり考えることを怠り、余った時間を無駄に費すことが多くなったのではないかと反省しています。

卒業後学生を指導、教育してゆく立場となり、遂に齢も50に達し老眼鏡を必要とする今、これまでの生活を振りかえり、物質文明にならされてきた自分を反省している昨今です。

(機械昭和28年卒、鳥取大学工学部教授)

創設の頃の市大理工学部

河合 和二郎

大阪市立大学理工学部は昭和24年に創設されたから、もう30年余りを経過していることになる。当時は終戦後まだ4年しかたっていない時で、大阪市内のあちこちには、まだ戦災の瓦礫が散在していた。その茫漠たる光景を横目に見ながら、黒ずんだ芦原小学校の仮校舎において、第一回生の講義が始ったのである。およそ大学らしい設備は何もなく、急造の階段教室が新しかった程度ではなかったかと思う。しかし、平和の中であって、立派な先生方から学問を学べるということが、如何に素晴らしいことであるか、私はいまだにその時の胸のときめきを忘れられないでいる。大阪市大の理工学部は、当時としては、新しい理念の下につくられた学部といわれ、Institute of Polytechnicsといい、Faculty of science and technology というありきたりのものではなかったのである。その名にふさわしく自由活達の気風に溢れ、

私共は多くの学問に接しつつ、秀れた先生方の人格、人間性に触れることが出来たのは、非常に幸せであったことを、卒業して26年たった今、振り返って述懐するのである。

「教育」とは、一個の人間が、たとえ困難や苦勞に遭遇したとしても、活力を保持し、勇気を奮いた、せることの出来る目に見えない文化的蓄積を与えることだとするならば、市大理工学部は正に理想的な教育の場であったということが出来る。現在でもそうあって欲しいし、そうあらねばと思う次第である。

政治、経済、科学技術等あらゆる面で大きな変貌を遂げた社会環境になったが、常に変らぬ大切なものを見失いたくはないと心に念じている。(応化、昭和28年卒、工業技術院大阪工業技術試験所 第2部研究室長)

オーディオ技術者からの提言

布施 規夫

オーディオ産業は80年代の今日、54500億円の産業に成長し、技術と感性の結合(感性産業)として脚光を浴びている。

このオーディオ界を盛り上げる先導的役割を演じているのはアンプで、ここ数年のアンプ技術の話題はつきず、最近ではサーボを含めたNF B周辺技術に目が向けられ、技術面では進歩をとげ、性能の向上に目をみはるものがあり、技術屋としてはたのもしいかぎりである。だが技術を重視する反面、感性にうたえる「音」については、技術的には組織力でもってしても個人の感覚にはかなわないというのが実状であり、テクニカルとメンタルな面はドッキングしにくいものと考えがちであるが、この結合こそ重要な問題であるので、何かの参考になればと思い、「音楽の光と翳」吉田秀和著)の説明を引用させて頂く。

——ベートーベンの音って?——

「ルドルフ・ゼルキンが日本に来た時、ある会社でレコードを作ることになり、ゼルキンはベートーベンのソナタを選び、会社はそのため日本で優秀なエンジニアとして知られたスタッフを用意した。機械も上等なことはいうまでもない。ゼルキンはスタジオに来て素晴らしい演奏をした。そのあと、録音室でテープをきいた。それをきくなり「これはだめだ、このまま市場に出すのは同意するわけにはいかない」と言い出した。理由をきくと、「これはまるでベートーベンの音になっていない」という返事、スタッフ一同あっけにとられてしまった。今の今まで、そんな文句をいわれた覚えがないので、ゼルキンが「これはベートーベンの音じゃない」といった時、技術者はその意味を汲みかねて、結果幻のレコードに終ってしまった。」

ベートーベンの音を理解させる言葉はなく真意を汲みとるのは感性である。こういった感性をもそなえたエンジニアがこれからのオーディオ界を背負うものだと思う。
(電気 昭和28年卒 オンキヨー(株)営業技術部長)

中年卒業生の近況

沼田 功

面白いもので、小学校、中学、高校、大学と一通り学校の門をくぐってきたが、昭和一けたの終りに生れ育った時代の環境のなせるせい、偶然の重なりか、いづれからも、同窓会に招待されたことがない。さりとて、自から同窓会を催して、旧交を暖めようという気概もない。学校へも寄り付かず、恩師にも誠に失礼なこと、反省しつつ、毎日の仕事にあくせくしているのが現状である。

たまたま、会報に一文をとご案内いただいたことをよいに、近況を報告させていただきたい。

理工学部を卒業してから、23年が過ぎた。ご多分に洩れず、段々と肥満体になり、中年の悲哀をかこつ年頃となった。卒業当時、50kg そそこの体重であったが、最近、当時より15kgを越える不要な脂肪と肉を、特に、腹や尻廻りにつけてのそのそしている。街角で、旧知の同窓生諸氏とお会いしても、見過されてしまうのではないかと思っている。

会社では、火力電源立地関係の仕事を担当して約10年になる。新しい技術を取り入れ、環境保全を第一に対応しているが、理屈だけでは行かない。特に地元の方々の合意を得るのに難渋している。我々が生きてきた時代は、それなりに色々なことがあった。その中で体得したことが、このような問題を対処するのに役立つように思える。この仕事も次々と新しい問題や、知見が出てくる。未だに勉強を怠ることができない。本を読み勉強せよと、後輩社員から口やかましい中年先輩と思われるのではないかと気にしている。

育ち盛りの子供を抱え家族から尻を叩かれ、迫りつゝある熟年時代に思いを遣り、一方では、世の中からこれからと期待されているものと自負しながら、気持だけは若々しくと頑張っているのが、我々の年代だと思っている。とりわけ中年同窓諸氏の一層の活躍を祈念して、近況の報告としたい。

(機械昭和32年卒、関西電力K. K. 本店環境部課長)

一層の努力を

鶴山 弘行

同窓会報に投稿依頼の文書をいただき、日頃のいそがしさに忘れられるもなく忘れていた大学のこと今更の如く思い出しております。

我々が入学したのは未だ敗戦の余燼が残っているといってもよいような時代で、我が母校は当時の流行語ともなっていた蛸足大学そのものでした。本部は西区の鞠の方にあり理工学部は扇町に2分割してありました。杉本町の方には米軍が駐屯しておりグランドからはヘリコプターが飛び上っていたような状態でした。実験も焼け残りの建物で、ないないづくしの中で取りくんでいたものです。実際、当時の日本の技術は欧米に10年以上も遅れた後進国そのものであったと思います。小生が今関係している建築の分野でもスコップとシャベルで穴をほっていましたし、何事も欧米の真似というべき技術導入全盛の時代でした。その日本が多く技術分野で現在世界をリードしているといわれる先進国の一員となり得たのか、その途中を歩んだ一人として、今考えてもさっぱり判りませんが我々の世代はとにかくよく働きました。現在識者は日本人の働き過ぎを悪いことのように言われますが私はかならずしもそうでないと思います。資源の少い国でやっていくには附加価値の高い高技術水準の品物を造り出す必要があります、それには水準の高い技術者が大量に必要なと思います。技術の分野ではいわゆるハッターは効きません。とにかく基礎の段階は大切です。後輩諸氏の一層の努力を願うもの一人です。

尚、同期生の動向ですが、私の知るかぎりの人は元気に各分野でご活躍のようです。只、大阪市水道局へ行かれていた宍田君を近年冥界へ送ることとなったのは残念です。田中米治先生、田中通雄先生と共にご冥福を祈るもの一人です。合掌 (電気 昭和32年卒 日本生命東京不動産部技術長補)

大阪への想い

津田 和一

万代池の辺りで生れ、阿倍野で育ち、大阪市大を卒業して32才迄大阪に住んでいたのが、何の因果か名古屋に住むようになって早や13年過ぎてしまいました。

ところが、住めば都とはよく言ったもので、最近では大阪へ仕事で行く(帰る)と、昔はあばたも笑窪であったものが、あばたはあばたとして見えるようになり気になり出してきました。大阪の玄関口、大阪駅前でさえ、ゴミくずがいたるところに捨ててあり、雑然として汚ならしく(大阪駅前再開発とは関係なく)まとまりのない町並み、街路樹は申しわけ程度に植えられているだけのガサガサした埃っぽい町……、これを大阪の人々は、活気に溢れた町、中小企業の町と称して自己満足し、都市機能の充実した町あるいは都市環境の良い町にする努力を怠っているとしか見えません。

このことは単なる皮相的な感想ではなく、種々の統計、アンケートをみても、大阪が都市としての活力、機能の

衰退を示していることや、一種住専地域すらないと云う住環境の悪さなど将来の大阪のイメージには肌寒いものを感じざるをえません。

大阪を愛しながらも、やむをえず大阪を遠く離れて住んでいる者にとっては、大阪が少しでも良くなってほしいと願う気持ちが大阪に住んでいる人々よりむしろ強いのかも知れません。大阪市大を出て大阪に住んで生活しておられる方々の力によって、大阪がより良い都市になり、発展していくように希望します。（応化・昭和33年卒・名古屋工業大学教授）

工学部同窓会臨時協力金のお願い

この度、当会の資金的基盤を確立するための2本柱の一つとして、臨時協力金をお願いすることになりました（第1回評議員会報告参照）。即ち、昭和52年以降入学準会員の終身会費の増額とともに、昭和55年4月現在の全正会員には一時的な資金援助として臨時協力金をお願いする次第です。

その金額は、2,000円（昭和20年～45年卒業生）と4,000円（昭和46年～55年卒業生）の2種類です。その払込み期日は会計年度の都合で昭和55年12月15日とし、未納旧会費がある方には一括でお払込み願うことになっております。

早速ですが貴兄に要請させていただく額は、同封の郵便振替用紙の裏面に記載（○印）いたしましたので、お早目にご送附下さるよう重ねてお願い申し上げます。



杉本町学舎全景（'80・9）

- ① 工学部 ② 理学部 ③ 田中記念館 ④ 生活科学部
⑤ 附属図書館 ⑥ 商・経・法・文学部 ⑦ 教養部

第1回評議員会の報告

当会は昭和52年に評議員を新設しましたが、その第1回評議員会を昭和54年6月23日(土)に、母校の田中記念館にて開催し、次の諸件が決まりましたのでお知らせします。

(1)会員名簿は4年毎に発行し、その間の3年は同窓会報(その年の卒業・入学者名簿、会員移動、会員・学部通信等記載)を全員配布する。

(2)同窓会事務局を開設する。但し当面は週10時間のパート・タイム勤務者1名とする。

(3)昭和52年の終身会費改正に伴う暫定措置として、昭和55年4月現在の全正会員に臨時協力金(別項参照)を要請する。その払込期日は昭和55年12月15日とする。

(4)昭和55年12月16日以降、終身会費は卒業年次にかかわらず一律に現行額を適用する(会則参照)。

(5)会員に特別準会員(会則参照)を新規追加する。

(6)当会々員の創立百周年記念募金への協力および同行事への参加を呼びかける(別項参照)

(7)当会の年度および会員追弔について別項(会則末尾参照)のように申し合せる。

工学部同窓会の20年

大阪市立大学工学部同窓会の創設は、理工学部が理・工学部に分離した翌年の昭和35年です。以来本年で20年が経過しますが、今後当会が有意義に活動を展開できるようになるには、各位の卒直なご意見・ご批判とご支援が不可欠ではないかと思えます。そこで、当会の20年の歩みをご理解いただくことを願いつつ、この間の概略的な経過を簡略に整理しました。

昭和35年11月 旧扇町学舎会議室にて設立総会を開催。理工学部工学系・工学部の学部および工学研究科卒業生約900名を会員として発足。

昭和36年3月 同窓会誌創刊号(約1000名の正会員を収録)を発行。

昭和39年8月 旧扇町学舎会議室にて第2回総会を開催。新役員、経過・会計報告を承認。終身会費の改正、旧制大阪市立都島工専同窓会の統合、大阪市立大学同窓会連合会への加入等を決定。

昭和41年2月 会員名簿第2号(約850名の都島工専卒業生、昭和37年以降の工学部・工学研究科卒業生約600名を追加収録)を発行。

昭和50年12月 会員名簿第3号(昭和41年以降新正会員約2000名を追加収録)を発行。

昭和52年1月 杉本町学舎田中記念館にて第3回総会を開催。約10年間の経過・会計報告、新役員を承認。評

議員の新設、終身会費の引上げ(会則参照)を決定。懇新会費剰余金にて記念館にラジオカセット一式を寄贈。

昭和52年3月 学部・大学院合格者へ当会紹介状・会則等配布。

昭和53年3月 学部・大学院合格者へ当会紹介状・会則等配布。

昭和53年12月 故長浦茂男教授工学部葬に会長弔辞、当会献花。

昭和54年2月 田中記念館にて森川学長(当時)、生川(商学部教授)・三瀬(工学部教授)両百周年記念事業委員と同窓会連合会理事懇談、大学側より記念事業計画を説明し協力を要請。

昭和54年3月 昭和53年度学部卒業生・大学院修了生および昭和54年度学部・大学院合格者へ当会紹介状・会則を配布。工学部送別式・同卒業祝賀会(3月24日)に会長・副会長他理事参加。

昭和54年6月 田中記念館にて第1回評議員会を開催。新役員(名簿参照)、経過・会計報告を承認。同窓会報の発行、臨時協力金の要請、同窓会事務局の開設、特別準会員の開設等(評議員会報告参照)を決定。

昭和54年7月 機械工学教室のご好意により、同窓会事務局を同教室図書室(工学部C棟2階)に仮設、当面市大事務職員OBの竹内ミサ子さんがパートタイム勤務(毎土曜日10時~16時他)

昭和54年12月 会員名簿第4号(昭和51年以降の新正会員約800名、昭和54年度在学生(準会員)約800名、新設の特別準会員約100名、旧理工学部教員、工学部非常勤講師等を追加収録)を発行。

昭和55年2月 有恒クラブ(商・経・法学部卒業生の同窓会である有恒会の会員交流施設)にて同窓会連合会の役員会を開催。次期連合会々長に平井常次郎有恒会々長(朝日放送(株)会長)を再選。森川学長(当時)より記念募金の進展状況等を拝聴。

昭和55年3月 昭和54年3月と同じ。

昭和55年6月 田中記念館にて同窓会連合会の連絡会議開催。11月15日の記念祝典参加卒業生数400名の各同窓会への割当検討、当会からは約60名に決定。市大後援会より募金受付状況報告。

昭和55年9月 田中記念館にて同窓会連合会の連絡会議開催。記念行事の卒業生・一般市民への通知方法、募金申込受付期日の延長、記念写真集の出版計画等の後援会案検討。

昭和55年10月 同窓会報創刊号(本報)を発行。

大阪市立大学工学部同窓会々則

設定：昭和35年11月3日

変更：昭和39年8月2日

々：々 52年1月22日

々：々 54年6月23日

第1章 総則

- 第1条 本会は大阪市立大学工学部同窓会と称す。
- 第2条 本会は会員相互の親睦をはかり、大阪市立大学の発展に資するを目的とする。
- 第3条 本会はその目的を達するために事業を行う。

1. 会報及び会員名簿の発行
2. その他本会の目的を達するために必要な事項

第4条 本会は事務所を大阪市立大学工学部内に置く。
(大阪市住吉区杉本町459 06-692-1231)

第2章 会員

第5条 本会は下記の会員をもって組織する。

1. 正会員
(イ) 旧都島工専卒業生、(ロ) 大阪市立大学理工学部(工科系)及び同工学部卒業生、(ハ) 大阪市立大学大学院工学研究科修了生。
2. 準会員
大阪市立大学工学部及び大学院工学研究科在学学生(本学部卒業生は除く)
3. 特別会員
(イ) 大阪市立大学工学部の教員(正会員は除く)
(ロ) その他理事会で推せんしたもの
4. 特別準会員
(イ) 大阪市立大学大学院委託研修生、大阪市立大学工学部及び大学院の研究生(ロ) (イ) 項の修了者(正会員は除く)

第3章 役員

- 第6条 本会に下記の役員を置く。
- 1) 名誉会長 1名、2) 会長 1名、3) 副会長 1名、4) 理事 若干名(常任理事を含む)、5) 評議員 年次別専攻学科毎に1名、6) 監事 若干名
- 第7条 名誉会長は大阪市立大学工学部長をこれに推す。
- 第8条 次の各役員は正会員の中から下記の方法によって選出する。
1. 会長及び副会長は理事会で推薦し評議員会の承認を得る。
 2. 理事は前理事の推薦とし評議員会の承認を得る。常任理事は理事中より互選する。
 3. 評議員は年次別専攻学科毎の互選、または役員会の推薦により選出する。
 4. 監事は理事会の推薦とし評議員会の承認を得る。

第9条 役員の職務は下記の通りとする。

1. 会長は本会を代表し、総会、評議員会、理事会を招集する。
2. 副会長は会長を助け会長に事故のあったときは、これを代行する。
3. 理事(常任理事を含む)は理事会を組織し、会務を処理する。
4. 評議員は評議員会を組織し、会長の招集に応じ重要事項を審議する。
5. 監事は本会の会計を監査する。

第10条 役員の任期は2年とし再任を妨げない。

第4章 会議

- 第11条 本会の会議は総会、評議員会及び理事会とする。
- 第12条 総会は会長、理事会、評議員会のいずれかが必要と認めるとき、または正会員の10分1以上の要求があったとき開催し、正会員の10分1以上(委任状を含む)の出席をもって成立とする。
- 第13条 評議員会は少くとも2年に1回開き、役員改選、事業報告、及び会計報告等の必要事項を審議する。このほか会長、理事会のいずれかが必要と認めるとき、これを開く。

第14条 理事会は会長または理事の3分の1以上が必要と認めるときこれを開く。

第15条 総会、評議員会及び理事会は出席者の過半数をもって議決する。賛否同数の場合は議長がこれを決する。但し準会員、特別会員、特別準会員は総会において議決権をもたない。

第5章 会計

- 第16条 本会の経費は会費、寄附金その他の収入を以って支弁する。
- 第17条 会員(特別会員及び特別準会員は除く)の終身会費は20,000円とし、入学時に納入する。
- 第18条 本会の収支決算は監事の監査を経て、評議員会に報告し承認を受けるものとする。

第6章 附則

- 第19条 本会の体面を汚し、又は秩序を乱す行為のあった者は理事会の議決を経て除名することを得る。
- 第20条 この会則の変更は、評議員の2分の1以上の同意がなければ行うことが出来ない。
- 第21条 この会則は昭和54年6月23日から実施する。

評議員会(昭和54年6月23日)申し合せ

- (1) 本会の年度は1月1日より同年12月末日迄とし、評議員会は1月下旬に開催するようにする。
- (2) 会員の追弔は次の通りとする。
正・準会員には弔電をし、特別会員には会長が理事会の同意を得て弔意を表す。

役員名簿 (任期昭和55年12月末)

会長 並河 俊次 (電気30) 副会長 大橋 弘之 (土木20)
 理事 東田 和郎 (機械20) 坂内 幾男 (建築24) 山榊 知博 (土木24) 人見 宗男 (機械31)
 大橋 邦夫 (応化32) 多胡 進 (建築34) 中井 博 (土木34) 美馬 宏司 (応物34)
 西村 昂 (土木36) 田守 芳勝 (応物38) 南斎 征夫 (機械39) 玉垣 誠三 (応化39)
 石黒 英治 (応物40) 東 恒雄 (機械41) 倉田 克彦 (土木42) 赤崎 弘平 (建築45)
 南 繁行 (電気45) 草開 稔 (電修46)
 監事 西田 新 (応物34)

評議員

卒業	機 械	電 気	応 化	建 築	土 木	応 物
20	宝力良幸	安藤慶一	—	高野晃嗣	能城正治	—
22	蔵田広造	高田満	—	村井建三	別所武雄	—
23	嶋田定定	塩山正治	—	西川幸之輔	岡正一	—
24	富田定定	金田弥吉	—	岡本修夫	植木正富	—
25	葉田喜一郎	中島弘	—	大東清四	生島一成	—
26	住友康祐	太田鉄造	—	小河一真	佐名越孝	—
28	中川晴夫	橋本賢一	井口悌三	福田充宏	—	—
29	日枝仁郎	立石浩二	田岡二郎	—	田井戸米好	—
30	杉浦重光	金田幸雄	岩井武彦	田口泰三	井田憲治	—
31	秋山高治	壺井芳昭	小林辰一	安藤昌範	嶋経夫	—
32	岩井宣雄	加藤隆三	木下雅悦	長町守康	吉村憬	上野敦
33	小西峻二	細川省一	福村吉晃	内藤徹男	高端宏直	薩摩逸雄
34	久門輝正	小西陽雄	上原敏男	木村久夫	山崎真喜雄	保坂博通
35	川越浩	石田喬重	櫛原章	小鳥弘	上田伸三	栗根克和
36	小川次夫	塩飽弘久	中出伸一	溝神宏至	園田恵一郎	村上宏仁
37	尾崎俊夫	高下照	近藤紘一	八木友興	西垣好彦	西村仁之
38	河内秀二	森下昂	浅岡力夫	有光友爾	小田一紀	嶋谷宏隆
39	土井紀宏	当麻円雄	渡辺隆夫	木本英誠	高山直俊	室野義三
40	小川建一	倉田征二	五百井正樹	浅野志義	山田勝比呂	片山賢三
41	溝口進	森井征二	山口英昌	貴志昭二	湊月秋利	八木邦夫
42	村田一夫	片岡香英	伊木義高	荒木弘昭	北田俊行	堀内泰司
43	木村義弘	山本正樹	谷本高敏	大倉良司	角野昇八	萬代信治
44	七條徳成	—	鈴木晃	久保田弘昭	小林治俊	和倉慎良
46	上道俊和	森下勉	山田悟	大西康雄	伊藤修章	岩永政義
47	岡本利一	赤木利行	吉田育義	三宅良一	岸田全玄	松田中義
48	辻本良秀	河合寿夫	林大鳴	井上清司	谷田俊寛	岩井健優
49	三木建康	広瀬義己	門脇敏夫	国田博己	黒谷泰良	小平松敏
50	中野康夫	金沢勝治	米田正博	北野崎道	長谷川博	長谷川博
51	坪倉由明	前田明	大屋尚洋	岡中三郎	松本彰彦	南太田
52	山中朗修	浜上明	親木康高	田中三郎	奥村彰彦	奥村彰彦
53	伊崎史史	三松下	中川柴	伊勢島	富岡和	—
54	芦田山	—	—	—	—	—
55	大	寛	徹	一	也	多

創立百周年記念行事のお知らせ

大阪市立大学は本年11月15日に創立百周年を迎えますが、その記念行事日程が決りましたのでお知らせします。

○11月2日 音楽祭（入場無料）

13時～森の宮市立労働会館ピロティーホール
大阪市大合唱クラブ、大阪市大オーケストラ、すみよし少年少女合唱団他。 松下真一作曲・幻想交響曲・「淀川」他。

○11月6、7日 無料法律相談

13時～16時（受付は15時迄）、田中記念館
遠田新一法学部教授（民法）、有恒法曹会所属弁護士他

○11月8日 講演会（入場無料）

13時30分～ S A Bホール（フェスティバルホール地下）。 瀬川美能留氏（野村証券取締役相談役）、早川幸男氏（名古屋大学理学部長、旧理工学教員）、谷口知平氏（大阪市立大学名誉教授）。テーマ「世界・日本・大阪」。

○11月9日 上方芸能を考える会、桂米朝師、桂枝雀師他。

14時30分～16時30分 田中記念館
10月25日迄に往復ハガキに住所・氏名・卒業学部・年次明記のうえ、〒558 大阪市住吉区杉本町459、大阪市立大学事務局「上方芸能を考える会」へ申込。定員 300名。

園遊会（自由参加）

17時～19時 大阪市立大学本館中庭

○11月15日 記念祝曲（会費制）

11時～14時、ホテル・プラザ
（注）各同窓会から 400名の卒業生が出席することになり、当会からは会長・副会長・理事（16名）・評議員（42名）約60名が出席することになっておりますのでご了承下さい。

百周年記念募金・記念写真集について

大阪市大後援会（電話 692-1231内線3510）の市大創立百周年記念募金は、（8月末現在）目標額（7億7千万円）の65%を突破しましたが、昭和55年9月末の申込み受付期日を更に延長されました。ご応募がまだの方はこの機会に是非ご協力賜りますよう当会からもお願い致します。なお、記念写真集の作成も進められておりますが、配布方法等につきましてはまだ検討中とのことです。後援会宛に直接お問合せ下さい。

編集後記

工学部同窓会の会報第1号がようやく皆様のお手許にお届けできることになりました。工学部同窓会が発足したときの第1号の名簿には会員の声を載せて会誌という名にしたのですが、以後途絶えて、その後は名簿のみになっていました。同窓会活動もこれからもっと同窓会らしいものにしていきたいという気運が高まってきて、これから会員相互をもっと繋いで行く必要があるということで、今回の試みとなったといえます。

第1号には、会長、副会長の挨拶の他に、名誉会長の三輪雅久工学部長に工学部の近況を、また各学科の近況を各学科の主任教授に執筆して戴きました。この他会員の声、昭和55年3月の卒業生、同4月の新入生名簿および会務報告等を載せております。卒業生、新入生名簿は同窓会名簿（4年に1回発行予定）の発行されない年度の分を毎年載せる予定であり、名簿と同じサイズで編集していますので並べて保管して頂ければと思います。

この会報は今後事務局と会員相互の連絡やいろいろの情報提供、近況報告、各地の支部的活動の報告のみでなく、会員の相互の交流、親睦を計る共通の場にしていきたいと考えております。楽しく有用な会報とするためのアイデアや、原稿、写真などを寄せ頂きたいと思っております。当分の間、年1回、年末発行の予定をしております。この他、同窓会活動全般についても建設的なご意見を、どしどし賜りたいと思っております。

なお、現正会員の方にはお願いしております臨時協力金および未払い終身会費の件もよろしくご協力下さい。

おわりに、工学部長、各学科主任およびその他ご寄稿下さいました方々に御礼を申し上げます。

（編集委員：南斎征夫（機39）、草開 稔（電46修）、大橋邦夫（化32）、赤崎弘平（建45）、西村 昂（土36）、石黒英治（物40）、人見宗男（機31））